

鹿毛の巻筆

近年、鳥取県では文字が書かれた木簡や、顔がえがかれた人形など古代の社会を知るうえで重要な発見が相次いでいます。では、これらの文字や絵は、どのような筆でかかれたのでしょうか？それを知る手がかりは、古代の書物や、奈良時代（1300年前ころ）の宝物を保管した正倉院にあります。

奈良時代に成立した日本最古の歌集『万葉集』には、シカの立場から人に利用される悲しみをうたった作品が収められており、そのなかで「吾が毛らは 御筆の栄やし」という部分があります。正倉院にはシカの毛の根元を紙で束ね穂先とした筆が残されており、実際にシカの毛が筆の材料に用いられたことが確かめられます。

また、古代の法令をまとめた『延喜式』からは、筆が各地で盛んにつくられていたこと、シカ毛の筆はウサギやタヌキのものよりかなり安かったことが分かります。古代の鳥取でもシカ毛の筆は広く用いられていたのではないのでしょうか。

シカは大昔から狩りの対象となり、肉や毛皮が利用されてきましたが、古代からは、情報を伝えたり、祈りを形にする筆の材料としても重要な動物となったのです。



(上) 大楠遺跡出土人形

おはらいに使われたもので、顔や服がえがかれているものが多いです。

(右) 青谷横木遺跡出土木簡

「黒稲一石」と書かれています。当時、稲に品種があったことが分かります。

筆の作り方



必要となる材料



筆先を竹に差し込みます。ゆるければ根本にさらにテープを巻きます。筆の完成です。



毛先の方向に注意して、筆先の形を整えます。不用な毛は外していきます。



墨汁をつけて、木簡や人形をつくってみましょう。もって帰ってから薄めたノリをつけると筆先がきれいにまとまります。



穂の根本をテープで巻きます。根元をノリで固めるのはスタッフが行います。



今回使用したシカの毛は、若桜29工房さんからご提供いただきました。